二三一六番
奈良山の　峰なほ霧らふ　うべしこそ　まがきの
もとの　雪は消ずけれ

二三一七番
こと降らば　袖さへ濡れて　通るべく　降らなむ
雪の　空に消につつ

二三一八番
夜を寒み　朝戸を開き　出で見れば　庭もはだら
に　み雪降りたり

二三一九番
夕されば　衣手寒し　高松の　山の木ごとに　雪
そ降りたる

二三二〇番
我が袖に　降りつる雪も　流れ行きて　妹が手本
に　い行き触れぬか